

「神 は 真 実」

ヨハネの手紙 一 第1章 5節～10節

説教 岡村 恒牧師

「(もし私たちが)自分の罪を公に言い表すなら、…」(9節)今朝の聖書箇所には、元の言葉では「もし～なら」という言い方が5回も繰返し出てきます。もし神との交わりをもっているなら、闇の中を歩むことなどできないはずだ、という強い言い方なのです。一度光に照らされたら、光と無関係な暗闇の中を歩くなど耐えられないはずだ、というのです。

信仰を持って生きるというのは、知識を得るとか、特別な境地に達するというものではありません。ある事実を知ってしまう、ある体験をしてしまい、もう何も知らなかったか以前のように生きることができなくなるという話です。聖書全巻が私たちにこのように語りかけるのです。神が天地を創造された時、「神は言われた。『光あれ。』こうして、光があった。」(創世記1章3節)のです。「初めに言があった。」、この言葉は「光」であったとヨハネによる福音書は語り始めます(1章1節～5節)。また、聖書の最後では「輝く明けの明星」である主イエスが「見よ、わたしはすぐに来る。」と宣言しておられます(ヨハネの黙示録 22章12節～16節)。暗闇に光を創造された神が、私たちの罪の闇の中に御子イエス・キリストを送り下さいました。やがて終わりの日に真実(まこと)の光である主イエスが再び来て下さいます。この光、主イエスに出会った者は、この光を知らなかったかのように生きることなどできない、と聖書は語るのです。

ヨハネの手紙一は、聖書全巻を要約するようにして「神は光」(5節)だと言い切ります。信仰を持って生きるとは、『神は光だ』ということを知り、体験することです。『神は光だ』ということがどういうことかを御言葉から聞き取り、『光である神に結びつけられ、光の中を生きるとはどういうことか』を味わいながら生きることで

実は私たちは、本当の意味で『光』を知りません。人間が造った『明かり』は知っていますが、これは簡単に失われてしまう光です。神がお造りになった本当の光を、私たち人間は造り出すことが出来ません。私たちは本来、光とは無縁だからです。生まれながら神に逆らい、闇の中を生きようとする存在です。神に照らされることがなければ、ただ闇の中をさまよい歩くことしかできない『罪人』なのです。『罪』という言葉はギリシヤ語では『的はずれ』という意味の言葉です。本来、神に向かって生きるはず

の私たちは的はずれ、神無しに生きようとするのです。冷え切った心を抱えて、憎しみ合い、争いが絶えない世界の中で、悲しみと恐れの中を歩む者です。そして、闇の中を歩み、神と交わりを持たない私たちの結末は、死と滅びです。

主イエスがお生まれになった夜、《神に栄光、地に平和》という讃美歌が響きました(ルカによる福音書 2章14節)。闇の中に神の栄光、光が照り輝いたと天の軍勢は歌いました。主イエス・キリストが来られて、世界が変わったのです。暗闇に光が照り輝きました。

神は光であり、神には闇がありません。神の前では、私たちの全てが光に照らされてしまいます。私たちには太陽を見つめることができないように、本来、神の前に立つことに私たちは耐えられません。ところが聖書は、光と無関係で、光の中に立つことさえできない者を、神が選び出し、造り変えて光を放つ者にしてしまうと大胆に語ります。ギリシヤ語の《光》は、《力》(Force)という英語の言葉の語源です。ただ物を明るく照らすだけでなく、物を動かし、変えてしまう《力》そのものです。神の力が私たちの罪を明らかにし、洗い清め、新しく造り変えてしまうのです。これが、《神が光だ》という言葉の中身です。ただ「自分の罪を公に言い表す」ことだけが求められます。自分自身が的はずれな罪人であることを認めることと、神の赦しの約束を信じる信仰を告白することは一つのことです。赦しが確実なので、安心して罪を言い表すことができるのです。

神の力がどれほど強力なものか一度知ってしまった者は、まるで光など知らないかのように闇の中に戻ることはできません。神との交わりを持って光の中を生きる生活に、神が私たちを招き入れて下さるのです。神が、一日一日、新しい命に目覚めさせ、神ご自身の御言葉の力によって私たちを生かして下さいます。

神は真実で正しいお方です。何の偽りもなく、闇とは無縁なお方です。私たちの罪を赦し、汚れを清め、光の子として造り変えて生かして下さいます。この神の約束は徹底的に実現します。だから、私たちは神の前に進み出て、全身全霊を御手にお委ねして歩み続けることができます。神の光、神の力の中を歩んで良いのです。神は、確かな希望の中を歩ませて下さいます。

(記 岡村 恒)